

令和 6 年度 第 4 回 加西市スマートシティ推進会議

開催日時	令和 7 年 2 月 2 6 日（水）午後 2 時 00 分～4 時 15 分
開催場所	加西市役所 5 階大会議室

出席委員の氏名			
岡田 美佳	木南 晴太 (リモート)	高井 淳匡	田畑 豊史
東根 光児	西尾 信彦(会長)	西村 雅吉	藤中 亮太
蓬萊 眞子	水田 善久		
欠席委員の氏名			
宮本 博文			

出席した事務局職員の氏名及びその職名	
深江 克尚	加西市 政策部長
大賀 暁	加西市 C I O 補佐官
山岡 和宏	加西市 政策部情報課 課長
伊藤 陽子	加西市 政策部情報課 主幹
馬渡 隆行	加西市 政策部情報課 係長
小山 映	加西市 政策部政策課 まちづくり推進員
(事務局補助)	電通西日本

会議概要
1 議事 (1) 前回 会議での 意見・提案 (資料 P1～P5) (2) 求められる推進組織の活動内容 (資料 P6～P21) (3) 推進組織のあり方 (資料 P22～P29)
2 資料 会議次第、委員名簿、資料
3 会議の経過 別紙「第 4 回加西市スマートシティ推進会議の経過」のとおり

発言者	会議の経過／発言内容
会長	1 挨拶 第4回目最後の会議となるが、年度末のお忙しい中お集まりいただきお礼申し上げる。 前は、ワクワクした感じがあり、自由に活発な議論ができ、話が広がったと思う。推進協議会として具体的な役割や方向性について整理しきれていないところもあり、今回はきちんとけりをつけて、来年度の推進協議会の立ち上げにつなげていきたいと考えている。 また、ワーキングに関するヒアリングの内容も承って、本日の会議で年度末のまとめにしたいので、よろしくお願いします。
事務局	2 議事 (1) 前回 会議での 意見・提案 (資料 P1～P5) の説明
会長	皆さんからのご意見を踏まえて方向性がまとめられているが、何かご質問やご意見があればお出しいただきたい。 協議会の次年度の活動について、具体的なワーキンググループをベースに進めていくにあたり、前回の議論のヒアリング結果を踏まえ、3つほどのワーキング案が考えられているので、皆さんのご意見と整合性を取る流れになるかと思う。 また、小学校跡地の利用については、すでに動いている事業との関係もあり、協議会が直接関わるワーキングとして進めるのは難しいが、連携は可能と思われる。
事務局	(2) 求められる推進組織の活動内容 (資料 P6～P21) の説明
会長	今回の資料について簡単にまとめると、P7は以前から提示されている事業全体の背景であり、P8は特に重要で、皆さんからいただいたご意見をまとめて、事業の方向性を整理した図になっている。 実は私が最初に説明を受けた時、このP8の図はなくて、いきなりP9にある3つの事業が並んでいたが、前回の皆さんの意見がどう反映されているのか全く分からないため、P8の図を追加してもらった。 前回の議論では「行きたい場所づくり」で非常に盛り上がったと記憶しているが、例えば小学校跡地の活用については別途検討しているため、そこと連携する形で進めればよいと考えている。 「行きたい場所」をつくった場合、そこにどうやって行くのか、また、高齢者が元気に暮らすために、どのように高齢者の活躍を促していくかということが課題となる。前回の議論では、高齢者が行きたくなる場所をつくるのが重要というご意見があったが、例えば高齢者

発 言 者	会 議 の 経 過 ／ 発 言 内 容
	がちよっとした隙間時間でも、特別な技能がなくても働ける場を提供できれば、高齢者の活躍の場が広がり、1つ目の事業「高齢者の就労支援」にもつながる。 具体的には、委員からご提案のあった介護施設での作業などのニーズがあり、モビリティ支援のために相乗り運転を行うという可能性も考えられる。 つまり、P9だけを見ると3つの事業は独立しているように見えるが、実際にはP8の図のように、それぞれの事業は重なり合っていて、就労のマッチングサービスや「ねっぴ〜」のデータ連携基盤が必要になるかもしれない。就労内容にはモビリティの支援に関するものが含まれ、その対価が地域通貨「ねっぴ〜」のポイントで支払われることで、地域経済の循環を生み出す可能性もある。 さらに高齢者に限らず、例えば隙間時間の就労や、委員が提案された農業の就労などもこの枠組みの中に十分取り込めると考えられる。 進められるところから徐々に進めていければという提案で、私の個人的な考えも入っているかもしれないが、皆さんからのご意見やご質問があれば是非お聞かせいただきたい。 P11にある南あわじ市と加西市の比較表は何を言いたい表なのか。人口規模が似ているということでしょうか？
事務局	人口規模が似ている点を示すとともに、20年後の生産年齢人口の推移を数字で示している。
会長	加西市は20年後の生産年齢人口が南あわじ市より少し多いが、この表の数字にさらに高齢者5000人（4割）を上乗せしたいという理解でよいのか？
事務局	そのとおり。加西市でも高齢者就業率を南あわじ市並みの4割に引き上げる目標としたいと考える。その結果、約1万9000人を生産年齢人口として確保することができる。
会長	南あわじ市で、3つの事業を動かした結果、どのような効果が出ているのか？
事務局	南あわじ市では、国勢調査の結果、高齢者就業率が事業開始前（平成27年調査）の約38%から前回調査（令和2年）で約40%へと2ポイント上昇している。数値として大きな変化とは言えないかもしれないが、確実に改善している。 加西市は現在の就業率が25%である。

発 言 者	会 議 の 経 過 ／ 発 言 内 容
会長	伸びしろについては不明な部分もあるが、何も取り組まないよりはいいかもしれない。 次年度は、この３つの事業をワーキンググループとして動かすイメージで進めるのか？ 委員の意見では、事業をまず前期に具体的に動かし、必要に応じて後から横断的な協議会を設置する方が自然ではないかということだったが。
事務局	ご指摘のとおり、まず前期に事業を具体的に進めて、必要性が明確になれば下期に協議会を立ち上げる流れを想定している。ただ、こうした事業はすぐに立ち上げることは難しく、半年程度は準備がかかると考えられるため、来年度からすぐに実証事業を始めるとは限らず、もう少し長期のスパンで検討や議論を重ね、段階的に実施につなげていくことになると思われる。
委員	先ほど事務局から、前回か前々回に私が発言した内容を踏まえた対応とのご説明があったが、少しイメージが異なっている部分がある。提示いただいた３事業については、大変よく整理されていると思う。ただ、南あわじ市や富山県の朝日町などの事例を参考にされていると思うが、それらはいずれも市や町が直接施策として推進されているものである。今回挙げられている事業も、加西市が担当課を明確に定め、地域のキーパーソンや必要な事業者の参画を得れば、市として十分に推進可能な取組に見え、協議会という器が必要というのはわかりにくい。 人材活躍推進事業、モビリティ事業、ねっぴ〜Pay、全部やったらいい、素晴らしい取り組みだと思うが、それらと協議会との関係性がいまいちはっきりと見えず、協議会という枠組みで進める必要性や位置付けが分かりにくかったというのが正直なところである。
事務局	ご指摘のとおり、今回示した事業は市の事業と非常に密接に関連しているため、一部については各担当課のみで実施可能であると思われる。特にデジタル要素がなければ、担当課だけで対応できるかもしれない。 ただ、複数の分野をまたぐ取組や、デジタル要素を連携させるような取組については、協議会という別の枠組みとする必要があると現時点では考えている。
委員	市役所の中で部局間連携が必要なのは理解できるが、私の協議会のイメージとは違うのかもしれない。

発 言 者	会 議 の 経 過 ／ 発 言 内 容
委員	私も同じように感じ、正直、民間の立場からすると、今の整理では全くワクワク感がない。前回の「行きたい場所づくり」の話では、民間も参加しながら一緒に何かできそうだと感じたが、今回のような取りまとめ方になると、自分たちが蚊帳の外に置かれたような印象を受ける。 本来、イノベーションや新しい価値観というのは、意見の中央値や平均値ではなく、それとは違ったところから生まれてくるものだと思う。意見をうまくまとめようとした結果、魅力がなくなっているように感じる。
委員	少し補足すると、本来、協議会というのは、参加メンバーが自発的にプロジェクトを生み出し、それが自然に発展していくような形が望ましいと考えている。私は以前、農業や教育などが最初に動き出せばいいといった趣旨で発言したが、それはまさに参加者自身の熱量で自主的に進んでいくプロジェクトを想定していたからである。 そうしたプロジェクトが生まれ、それをさらに市として位置付け、参加者を増やして地域に普及・定着させるための仕組みとして協議会があるというイメージを描いていた。 本日の資料は整理として良いと思うが、それ以外にも参加者が面白がって飛びつくような新しいプロジェクトが次々と湧き上がるような仕掛けが重要で、これはまさに委員の問題提起とつながっていると思う。
事務局	今回の案はあくまで市として実現可能な範囲で例示したものであり、これとは全く異なる取組を進めたいというご意見があれば、その点も含めてぜひご議論いただければと思う。 少し補足させていただくと、前回の「行きたい場所づくり」は、ビジョンとなるテーマだと思う。ただ、小学生なら USJ のような場所、高校生ならアスティアかさいのような落ち着いて勉強できる場など、年齢や立場によって求める場所は異なる。委員との話でも、90 代の高齢者がカラオケの場に喜んで参加されるなど、対象者により具体的な内容が違う。そのため、「行きたい場所」というテーマは大きなビジョンだが、具体的には「誰のために何をやるか」を絞る必要があり、その具体的な実装を個別のワーキンググループが推進していけばよいと考える。 また、委員から、買い物難民の高齢者に 30 分 250 円で買い物代行や蛍光灯の取り替えなどを行う取組の話があったが、これは若者の隙間時間活用モデルにも合致する。ただ、この活動を成立させるために

発 言 者	会 議 の 経 過 ／ 発 言 内 容
	は、誰がいつ、どのような支援を必要としているかという情報が必要であり、また、支援者と高齢者との相性も重要となる。そのため、こうしたマッチングを効率的に進めるためのプラットフォームを一つ創り、データを蓄積してニーズを把握し、新たなサービス設計につなげることに価値があると思っている。 もちろん、プラットフォームだけで全てが解決するわけではなく、ワーキンググループとしては、このプラットフォーム創りから始めてみてはどうかという提案で、他の取組から始める選択肢もあるかと思う。
委員	おそらく、今回の資料に示されたネーミング自体が、よくないのではないかと感じている。 私自身も、市が進める人材活躍推進事業のように、ねっぴ～Payを活用してキャリア教育における学びのログが蓄積される仕組みができることは理想だと考えている。 ただ、「行きたい場所づくり」を考える場合、小学生、高校生、未就学児、高齢者など、それぞれが求める場所やニーズは異なるので、具体的な事業内容を決めるよりも、協議会で「行きたい場所づくり」をしたい人たちが自発的に活動できるプラットフォームを用意し、そこに様々なアイデアを持つ人が自由に参加できる仕組みをつくることが重要だと思う。 協議会の役割として、加西市のスマートシティビジョンの方向性を明確に示した上で、それに共感し、地域の楽しさや魅力を創り出す意欲のある方々が、ワクワクと楽しく自発的に参画できるプラットフォームを提供する方が望ましいのではないかと思う。
会長	私も最初は委員と同じ印象で、この事業に対してワクワク感はなかったが、先ほど私が説明したように、P8 資料にある「行きたい場所づくり」の部分をビジョン、つまり目指すべき方向性として捉えるとよいというのが私の意図である。
委員	理解した。
会長	今回掲げられた3つの事業をそのままワーキンググループとして進めるのは少し違うかもしれない。ワーキンググループが機能するためには、その事業をやりたいと強く希望する人が中心になり、主体的に活動する必要がある。 市が主体となると縦割りになり、事業間の連携が難しくなる可能性がある。逆に、明確な目的やモチベーションを持つ人が中心になる

発 言 者	会 議 の 経 過 ／ 発 言 内 容
	と、自然と複数の事業を連携させる必要が生じ、こうしたモチベーションを持った人が中心となって市の事業を引っ張っていくことが、ワーキンググループや協議会の本来のイメージになるのだと思う。
委員	スマートシティ推進の意義について改めて考えると、一つは地域課題の解決、つまりデメリットを改善するという側面、もう一つは地域の長所、メリットを伸ばし、活力や魅力を生み出すという側面になる。 今回提案されたものは課題解決にかなり偏っているように感じており、「ワクワク感」など、地域の魅力を高めるという視点が弱い印象を持つ。委員のご意見にもあったように、立ち上げる事業において、課題解決と魅力向上のどちらを重視するのか、あるいは両者のバランスをどう取るのかを明確にすることが重要ではないかと考えられ、この点を明確にした上で進めることが必要だと思う。
委員	私はヒアリングを受けたが、特に違和感はなかった。事業を進める上で自分に何ができるのかという視点で話を聞いていたが、前に進めていくには、外部の人が感じるワクワク感や、自分たちがやる側としてのモチベーションが重要になる。せっかく私たちが呼ばれているので、柔軟に活用していただきたいと感じている。 ヒアリングを受けたときは「加西総株式会社」といったことなども含め、通常の会議では発言しづらい内容も自由に意見交換ができた。そこから新しいアイデアや事業が発展していけばよいと思っている。
事務局	委員が言われたように「事業」という言葉で示されたために、かえって柔軟性がなくなってしまった印象がある。内容自体に問題はないと思うが、例えば名称を「ビジョン」など柔らかいものに変えることで、より柔軟で自由な発想が生まれやすくなるのではないかと。
委員	「人材活躍推進ビジョン」や「地域モビリティビジョン」といった表現にすると、柔軟で幅広いイメージになり、議論しやすくなると思う。
事務局	必ずしも「ビジョン」という言葉にこだわる必要はないと思われ、また「人材活躍推進」という表現自体も漢字が多く堅い印象があるので、ひらがなを取り入れるなど、より柔らかく親しみやすい言葉に変更してもよいのではないかと。名称を変えることで、参加者が感じるイメージやワクワク感を高められるのであれば、それは非常に良い変更だと思われる。

発 言 者	会 議 の 経 過 ／ 発 言 内 容
会長	名称を変更するとイメージが変わるのは理解できるが、そもそもビジョンとワーキングの関係が明確でないと次に進めないので、しっかりと方向性を整理し、まとめる必要がある。
事務局	名称に関して言えば、「プロジェクト」という表現のほうが柔軟に捉えられるかもしれない。
委員	「プロジェクト」よりも、複数の取組を包含できる「プログラム」のほうが良いのではないか。
会長	ただ、名称を決める前に、ワーキンググループとの関係性を整理する必要がある。ワーキングは具体的な事業を進めるために存在するものであり、実施する人自身がワクワクできることが重要となる。しかし、今回掲げられた3つの事業だと、ワーキングとしては狭すぎて、単に市の事業でやれば良いという印象を与えてしまうのではないか。
委員	私は、目的が課題解決か地域活性化かで、方向性が変わると考えている。課題解決を優先するなら地域モビリティなど具体的な施策が中心となるが、活性化を重視するならば、市の強みを生かした取組が必要になるのではないか。
会長	このままの3つの事業でも、ワーキングとして成り立つ可能性もあるということでしょうか。
委員	はい、その可能性もある。
会長	事務局では、これらの3つの事業をどう位置づけているのか。
事務局	現状では市の事業を中心に整理しており、人材活躍は長寿介護課、地域モビリティは政策課（公共交通担当）、ねっぴ〜Payは産業課が中心となり、複数の課が関わって進めていくイメージである。
委員	それはむしろ逆の考え方ではないかと思う。まず、例えば人材活躍推進などのテーマがあり、それに対して民間の方々が自由に「こうしたい」という意見を持って集まる。それに応じて各担当課や関係機関が横断的に協力する、というのが理想的なワーキンググループの姿ではないか。
事務局	おっしゃるとおりで、現状では市の事業が主体であるかのように見えるが、実際にはそうした形で柔軟に取り組めるようにすることが望ましいと考えている。 市の複数の課が連携して進める際にも、責任を明確化するため、中心的な担当課をはっきり決めておくことが重要で、最初は仮でも構わないが、最終的には最適な課を窓口として位置付ける必要がある。

発 言 者	会 議 の 経 過 ／ 発 言 内 容
委員	市が協議会を設置する以上、市側に担当窓口があるのは当然のことだが、スマートシティ推進協議会は民間、市、市民が協力して運営するものであるため、市の担当課がどこになるかは協議会にとって本質的ではない。それは市の中で整理すればよいことで、むしろ重要なのは、協議会自体が自律的でアクティブに動ける仕組みを作ることだと考える。
会長	協議会が主体的に活動できるのが理想だが、実際には協議会が十分に機能しない場合も想定されるため、市がサポートや指導を行う必要が生じるかもしれないので、市としてはそのような役割を考えているのではないかと思われ、アクティブな協議会となるような構造や仕組みづくりが重要である。
委員	学校跡地の利用（資料 P18）について確認したい。利用の優先順位としては、まず民間事業者への売却、その次に賃貸、市による管理の順だと理解するが、一方、資料 P19 を見ると、最初に区長会や自治会、関係団体などで活用方法が議論され、最後にプロポーザル形式で民間事業者が選ばれる流れになっている。しかし、それだと民間事業者が最初から活用方法の議論に入っていないので、決まった内容に後から事業者を合わせることになり、最初から民間を巻き込んで議論したほうがよいのではないか。
事務局	プロポーザルを行う際に地元住民の意見を条件として盛り込んでいくという考え方が基本にある。地元の方にとって小学校の廃校は非常に重要な問題で、さまざまな思い入れや要望があり、最初から業者の希望を全面的に優先し、高値をつけた業者に売却する方法もあるが、実際は地元の意見を尊重し、業者提案と調整しながら活用方法を探っていく方向である。既に民間から活用に関する問い合わせもあり、地元住民への説明会を各校区で 2～3 回実施し、現在は業者からの提案を受けつつ、住民から意見聴取を行っている段階である。
委員	了解した。
会長	委員は具体的にこういった利用をイメージされているのか。
委員	分かりやすく言うとグランピングのような活用がよいのではないかとと思っている。
事務局	地元からもそのような意見が出ている。
委員	施設の維持管理費が年間数千万円単位でかかることを考えると、一定の収益性が必要で、収益性を考えたら、ある程度の集客力がある事業が求められる。一方、サービス重視で地域住民の生活の質を高める

発 言 者	会 議 の 経 過 ／ 発 言 内 容
	という方向性もあり、そこはどちらに重きを置くのか検討が必要だと思う。
事務局	学校施設も校舎、グラウンド、体育館とあり、それらを一体で活用するのか、個別に分けて活用するのも考える必要がある。建物の状態によっては解体が必要になることもあるので、施設ごとに個別の判断が求められる。また、住民の思いが強いため、事業者や市の提案だけで短期間で決定するのは難しく、十分な時間をかけて地域の意向を踏まえた落とし所を探る必要がある。
委員	ただ、あまり無難な案で落ちてしまうと魅力が薄れてしまうのではないかと感じる。事業者の視点で言えば、ある程度の収益を確保し、高齢者の雇用創出など地域経済に貢献するためにも、集客力のある施設の方がよいのではないかと考える。
委員	P10 に示された南あわじ市の「高齢者等元気活躍推進事業」についての質問で、実際の福祉現場を詳しく知らないので教えてほしいのだが、65 歳以上のシニアの方々は本当に働く場を求めているのか。委員の話では、例えばカラオケなど、働くというより楽しめる場を求めている印象を受けたが、実際はどうなのか。
委員	実際には高齢者の方はお金を求めている面も強いところがある。高齢者のボランティア参加が少ないのは、無償ではなく、お金をもらえる活動を希望する傾向が強いためだと思われる。ただ、趣味や特技で自分の時間を楽しんでいる方も多く、アンケートでも「ボランティアをやりたいくない」という意見のほとんどが、自分の時間を趣味や特技に使いたいという理由だった。そのため、高齢者施策としては、必ずしも全員がボランティアや仕事をするのではなく、選択肢を増やし、それぞれが自分の時間を充実させ、生きがいを感じられる環境づくりが重要だと思う。また、年代による違いも大きく、90 代以上では趣味に没頭している方が多いが、60 代の方だと働きたい方が多くなっている。最近では、自治会役員などでも忙しい中で仕事を続けている方もおり、以前とは意識が変化していると感じている。今後は、自由な時間の使い方にポイントや付加価値を付けることで、50 代～60 代の人たちの意識も変わってくるかもしれない。
事務局	現在、健幸ポイントとして病院やクリニックの健康キャンペーンに参加するとポイントが付与されてインセンティブになっている。それが地域の「ねっぴ～Pay」と連動していて、今後、民間事業者と連携し、ボランティアと労働の中間のような形で、適切な報酬やポイント

発 言 者	会 議 の 経 過 ／ 発 言 内 容
	付与ができれば、働くという感覚を与えずに気軽に参加してもらえるのではないかと考えている。
委員	シニアの方々からは「毎週月曜日だけ」といった束縛を嫌がる傾向があり、月に2～3回、自分の空いた隙間時間に自由に参加できるような活動を求めている方が多く、仕事かボランティアか趣味かという意識も個々によって異なっているというのが現状だと思う。
委員	言葉だけで具体性が見えず、ワクワク感がないように感じる。
事務局	実際、高齢者の方は10ポイントのために高いガソリン代を使ってイベントに参加してくれる。
委員	高齢者は「支えられたくない」と思う人が多く、がまん強い人が支えたり支えられたりできるのがよい。働きたい人は仕事を選び、趣味を生かしたい人は遊びの方ができる場というように、多様な選択肢が必要だと思う。
会長	次年度のワーキンググループの立ち上げ方について議論する必要があるが、市が主体で行う事業をワーキンググループ化しても意味が薄い。課が粛々としてやるのであれば、最初に委員が言われたみたいに、市がやればいいという話になる。各課が民間事業者と連携して、自主的に取り組みたくなるような活動を設定し、それを横断的に支援していく仕組みにすることが重要ではないか。例えば、高齢者の就労支援と地域モビリティを連携させ、民間とともにサービスを展開するといった具体的な進め方がよいのではないか。
事務局	確かに、やりたいことや行きたい場所をつくるという原点に立ち返り、各課が単独で動くのではなく、連携して取り組めるような形で進めるのが望ましい。
委員	市が主体となって民間事業者に委託するような形でも事業自体は進むと思うが、本来目指すべきは、民間が自主的にやりたいことを実現できる環境を整えることだと考える。そのためには、どのような仕組みやルール変更が必要なのか、また、どこへの橋渡しが必要かを協議会が考えるべきである。そのような環境づくりに協議会が役割を果たすべきであり、特に教育分野で進めるのであれば自分も積極的に参加したい。
事務局	教育関係で民間が具体的なアプローチをした場合、教育委員会がどのように受け止めるかが気になるところである。
委員	学校教育そのものは教育委員会の所管になるため、少し軸をずらした「グレーゾーン」を狙った事業を考える必要がある。例えば部活動

発言者	会議の経過／発言内容
	や生涯教育など、実際には生涯学習課があっても動きが取りにくい分野があるが、そこに民間が入り込めるようなワーキンググループが協議会に設定されれば、自分としても積極的に参加したいと考える。また、リカレント教育やリスキリングのような取り組みは学校教育課や公民館だけでは難しいため、横断的に進められれば魅力的である。そうした取組であれば、自分も積極的に関わりたい。
会長	その話は、今回掲げられている3つの事業と関係があるのか。
委員	恐らく「人材活躍推進事業」に位置付けられるものだと思う。社会福祉協議会が進めている内容も、人材活躍の範囲に含まれるイメージがある。これは仕事としても、ボランティアとしても、または自分が教育者側になるなど、さまざまな方法があると思うが、取組を開始すれば積極的に参加したいという人が集まるイメージを持っている。
会長	委員の買い物支援などは、1番目や2番目のビジョンが下支えをするようなワーキンググループも考えられる。委託という形ではなく、サービスを実施する民間をビジョン側が支えるような関係性であれば、成立するのではないかと考えている。グランピングだと難しいと思うが、そうしたサポートの形での関係性を考えてはどうか。事務局として、このような考え方は難しいだろうか。
事務局	市が事業としてやっていくというよりも、今おっしゃられた2本のビジョンを支え、1～3の取組を支えるという方が良いと考えている。
会長	行政としては課題解決を直接進める事業も必要であるため、それをやめてしまうということではない。それを継続しつつも、同時に民間が実施する事業を支えるという両輪で進めるのが良いと考える。魅力を高める取り組みと課題解決の取り組みの両方を動かすイメージである。また、例えば委員の農業分野が加われば、新しい軸も生まれる可能性があるが、委員の考えはどうか。
委員	行政らしい上手なまとめ方だとは思いますが、本当にこの短期間で形にできるのか疑問に感じている。委員もおっしゃったように、ただ文字を並べても仕方がないし、その辺りはどうなのか。
会長	行政側からはなかなか「ワクワク感」が出にくいので、結局、エビデンスとして数値的に何パーセント向上したかなど、明確な成果を示すしかないと思う。それがなければ、単なる予算の無駄遣いになってしまう懸念がある。
事務局	例をあげると、昨年夏頃に製造企業を訪問した際、障がい者雇用を進めているというお話があった。しかし、工業団地周辺には公共交通

発 言 者	会 議 の 経 過 ／ 発 言 内 容
	がなく、障がいのある方々が通勤できない状況が生じているとのことで、障がい者雇用を法的に増やさなければならないのに、数人や車いすの方のために新しくバスなどを用意するのは難しく、解決策がない状態が続いているとのことだった。 例えば、ある時間帯に駅やどこか特定の場所から会社まで送ってほしいというニーズがある障がい者の方と、その時間に 15 分程度なら車を運転して送れるという方をマッチングできればよいのではないだろうか。ただ、専用の車両がないという問題はあるが、例えば市の車を活用して運転だけを行い、その対価を「ねっぴ〜Pay」で支払える仕組みを作ることによって解決できるかもしれない。このようにして、ニーズや支援の記録をデータとして残せれば、良い仕組みになるのではないかと考えた。 また、これと同じプラットフォーム上で、高齢者の地域支援や、委員が提供しているお弁当の配送にも利用できると思う。委員が 1 人で調達・調理からお弁当を作るところまでできても、配送先が流通ルート外だと個別に対応するのが難しい。業者を利用すると定期的な大量発注が条件となり、ピンポイントな配送ニーズには応えにくいのが現状である。そのため、発生した配送ニーズに柔軟に対応できる仕組みが必要だと感じている。 つまり、いずれの場合でも「マッチング」「届ける」「支払う」という共通機能が必要になってくるので、これらを中立的なプラットフォームとして構築し、横串機能として活用できるのではないかと考えている。そしてこの横串の上に、障がい者の通勤支援や弁当配送、あるいは子どもが行きたい場所に行けるようなサービスなど、さまざまな縦軸の具体的な事業やサービスが乗るようなイメージが描けるのではないだろうか。 この横串部分を創るために、興味や関心のある人たちが集まってワーキンググループを作り、「とりあえずやってみる」ということが必要なのではないかと感じている。
会長	やはり横串がワーキングだと思う。
事務局	縦のソリューション、つまり具体的な課題解決や望みを実現する話の方が、ワクワク感が出るのかなと思っている。ただ、今日はそこまで十分議論できなかったもので、引き続き、自分たちにとって身近に感じられる利用シーンをもう少し明確にする場が必要なのではないかと考える。今日この場ですべてを決めなくても、そういった具体的なイ

発 言 者	会 議 の 経 過 ／ 発 言 内 容
	メージを共有する場を設けて、皆さんのアイデアやニーズを出し合っていたいただくことも重要だと思っている。推進会議は全４回でいったん区切りとなるが、そこから新たなワーキンググループを生み出すような場を設定した方が、次へのギャップが埋まるような気がするが、どうだろうか。
委員	何をやるにも、「ねっぴ～Pay」やデータ連携基盤のような横軸の要素は必要となる。すべてを市が直接事業として実施するのは難しくても、必要な対価の仕組みを「ねっぴ～Pay」で提供するという枠組みがあれば、民間がやりたいことを実現しやすくなる。例えば、公共交通の問題を行政がマイクロバスで対応するのは難しいが、民間とマッチングして解決するような話なら現実的だと思う。つまり、このような横串的な要素を支えるワーキンググループは必要で、それぞれの事業に対して複数のワーキングが絡むイメージが良いのではないか。例えばグランピングを行うとしても、地域の人材活躍、移動手段（モビリティ）、決済機能（ねっぴ～Pay）という三つの切り口が必ず必要になるはずで、これは農業や教育といった他の分野でも同じことだと思う。
事務局	今のお話のように、マッチング、移動手段、決済機能という３つの視点から議論を進めてみると良いかもしれない。これら３つの視点で検討した結果、もしどれにも当てはまらない内容であれば、それはスマートシティの議論とは別の場で行っていただければよい。しかし、この３つの切り口でうまく関係性が見えてくれば、スマートシティという言葉にこだわらずとも、デジタルを活用する意味が明確になるのではないだろうか。その段階で、具体的に実証実験に移行するのか、またはすぐに実施するのかは、それぞれの事業の内容や完成度を見ながら、個別に判断すればよいと思う。
委員	民間が何らかのプロジェクトを立ち上げ、それに対して３つの横串のワーキンググループが関わっていく、という話ならそれでよいと思う。
会長	市の課をワーキンググループと呼ぶということか。
委員	３事業をワーキンググループと位置付けて、そのワーキンググループは横串で、事業そのものは縦軸として存在をしていると考えている。
事務局	ワーキンググループの定義の問題だと思う。例えば技術的な視点からは、決済、モビリティ、マッチングといった機能ごとに横軸を設け、その上に課題解決型のプロジェクト（ソリューション）を縦軸と

発 言 者	会 議 の 経 過 ／ 発 言 内 容
	して並べている、という考え方もある。委員が言われているのは、横軸の機能別の集まりをワーキンググループと仮に呼んでいるだけで、それにこだわっているわけではないということで、別の名前でもよくて、その機能軸で一緒に取り組みたい人が集まる場として考えればよいと思われる。
会長	機能軸だけ作っても意味がなく、具体的な事業軸も設ける必要があるということである。
事務局	具体的な事業軸を何と呼ぶかということは、また別途検討すればよいと思う。
会長	名前については、今はあまりこだわらずともよいと思う。そろそろ時間も迫っているので、次年度の活動に向けてどのような要素を追加すべきか、今後の議論につなげていくことにする。
事務局	(3) 推進組織のあり方 (資料 P22～P29) の説明
会長	先にポイントとなる P23 と P24 について整理することにする。
委員	1 点確認だが、スマートシティ推進協議会における「実証事業」と「ワーキンググループ」は別のものか。
事務局	ワーキンググループの活動の中に実証事業が位置付けられているイメージである。
委員	では、実証事業はワーキンググループごとに実施するイメージか。
事務局	そのように考えている。
会長	先ほどの議論で出てきた「機能軸」と「事業軸」の考え方而言えば、事業軸にあたるのが「ワーキンググループ」という認識でいいと思う。「機能軸」がどこに位置付けられているかという、P24 の図の一番下の「ワーキンググループ準備会」になる。 この準備会で各機能軸を整理し、それを具体的な事業軸として形にしていく作業が、上期の「検討会」で進めるという流れだと思う。 現在提案されている 3 つの事業軸は、市が実施主体となって支援していくものになる。
委員	理解した。
事務局	市はあくまでも外からの支援ということでよいか
会長	検討会ということでは市はワーキングから外に出ただければ結構で、協議会の中に入っただけのは構わない。
委員	おそらく実証事業ごとに、人材活躍推進、地域モビリティ、ねっぴ～Pay 活用といった機能が、それぞれ関わってくるイメージかと思

発 言 者	会 議 の 経 過 ／ 発 言 内 容
	う。3つの事業が実際に立ち上がれば、各担当課がそれらの実証事業に関与していくことになるという流れが、これまでの議論の中で示された理解だったのだが、この認識にずれはないか。
事務局	縦軸にある事業（またはワーキンググループやソリューションと呼んでもよい）について、それぞれが横軸の要素（マッチング、移動手段、支払い）と関係があるのかどうかをまず検証する必要がある。もし「つなぐ」という要素が関与しないのであれば、支払いや移動に関与の余地があるのかを見ていく。それでも関連がなければ、これはスマートシティの議論で取り上げる意味がない、ということになり、逆にすべてに当てはまるものなら、具体的な資金調達や実行の議論に踏み込むことになるだろう。 この横軸の価値や要素を検証する活動を、市単独で行うのか、それともより深く正しい評価を行うための専門的なチームを設けて進めるのかについても、検討する必要があると考える。
委員	ワーキンググループには、その分野に詳しい有識者や学識経験者、または関連する領域の専門家が関わってくるというイメージでよいのか。
事務局	その事業領域に長けた人が加わる。多様な視野や知見を持つ人がいないと、事業や取組が、本当に意味があるかどうかを見誤ってしまい、もったいないことになる。ただ一方で、ここでワクワクするようなアイデアや「できたらいいな」を生み出すのが得意な人と、そのアイデアを実際の仕組みや組織として具体化することが得意な人は違うように思う。そのため、この検討会では、具体化の部分を別途考える必要がある。アイデアを形にする専門の人材を新たにつくるのか、あるいは外部からそういった人を受け入れるのか、その体制や組織づくりをどうデザインすべきかを検討しなければいけない。 現時点ではまだ白紙に近い状態で、一応資料には何かの枠組みを書いているが、本日の議論を踏まえると、正直あまり適切な形ではないことが見えてきた。そうすると、再度白地のキャンバスに組織のあり方そのものを描きなおすことが、この検討会の新たなミッションになると思われ、そこで描いたものを協議会という形にしていけばよいことになる。 これまでのように、市が単独で持ち帰って、市の都合でデザインした案を再度提出するというやり方では、委員をはじめとした民間の方々から見れば、「ワクワク感がない」とか「おかしい」という意見が出るのは当然で、そうではなく、この組織や仕組み自体を協議会と

発 言 者	会 議 の 経 過 ／ 発 言 内 容
	して協創して描くことが必要であり、このデザインそのものを検討会の中で行うべきではないか。これが、私が現在考えている一つの提案である。
委員	実証事業は、例えば小学生を対象とした取組でもよくて、専門家や市が「この事業をどう見たらいいか」「どんなサポートが必要か」を考えるようなイメージでよい。
事務局	具体的に小学生をどう集めるかなどの詳細な課題はひとまず置いて、今の段階では自由な発想で考えていけば良いと考える。
会長	事務局として、そこまで話を戻してよいのかというのは難しいところだが、もしそうした形で進めるなら、来年度の上期をそのような検討期間として活用するのも有効だと思う。
事務局	私個人の意見だが、もし機能しない枠組みを作って半年間検討し、結局動かないと見えるようなら、早めにその仕組みをやめて、もう一度ゼロから考え直したほうがよい。行政がよくやりがちな、無意味な検討を続けることが一番よくないと思っている。 そのために、産学官民の委員が集まって議論しているわけで、市が自分の考えを押し通すだけなら、わざわざ委員を集める必要はなく、動く仕組みを協創していくことが課題と認識している。動かない仕組みを作っても時間の無駄なので、そこはきちんと動く仕組みを皆で描いていくことを重視したい。
委員	「みんなが協力しようよ」ということで、私も協力をしたいと思う。
会長	他に話しておくことはないようなので、名前についてはワーキングを含め、すべて仮称ということでよろしいか。 進行を事務局にお返しする。
C I O 補佐官	閉会 最後に私から、シナリオのない個人的な見解をいろいろ申し上げたが、動く仕組みをつくりたいというのが私の本音で、「絵を描く」というよりは、「動かせるようにしたい」というのが率直な気持ちである。 ただ、実際に動かすための知恵がまだ足りていないことも事実で、ぜひ引き続き知恵を出し合うことにご協力をお願いしたいので、「もう少し知恵ぐらいなら出してもいいよ」という方がおられましたら、ぜひ継続してご協力いただければありがたい。

発 言 者	会 議 の 経 過 ／ 発 言 内 容
	また、「こういう知り合いを巻き込んだらどうか」といったご提案があれば、ぜひご紹介いただきたいし、口説く際に手伝ってほしいということであれば、一緒に口説きに行くことも喜んでお手伝いしたい。そうした形で仲間を増やしながら、取り組みを進めていければと考えているので、是非ご協力をお願いします。